

家庭教育支援協会

会報誌 16 号

あなたにとっていい学校はどんな学校ですか？

家庭教育支援協会理事長
二川 早苗

そう問われたらあなたはへと答えますか？

OECD の学力調査で毎年世界 1, 2 を争うフィンランドでは、「家からいちばん近い学校」と答える子どもが一番多いそう。なぜならこの学校に行ってもレベルが同じだから(映画「マイケル・ムーアの世界戦略のススメ」2016 年より)。日本より授業時間は少なく、宿題はなく、全国统一テストもない。なのになぜ？とってしまう。しかし、そう考えること自体が既成の価値観に囚われているのだろう。勉強時間も宿題も多い方がよく、競争で切磋琢磨してこそ学力が定着するのだと。

確かに現在の日本社会はそう。ところがそれだけが正解ではないことをマイケル・ムーア監督は、示唆している。それよりも、子どもや先生たちの笑顔にこそ解が潜むのだ。塾通いの子どもたちや雑務に追われる先生たちに会心の笑顔は見られるのだろうか。

「タイパ」(タイムパフォーマンス、時間効率)を重視する人が増えている社会では、タイパはジェンダー問題や働き方改革に寄与するというよい面もある一方で、他方において子どもたちは時間に追い立てられてはいないだろうか。

私は、給食の時間が嫌いだった時期がある。給食の時間になると泣いていた。食べられないのだ。ピーマンが嫌いとかニンジンが食べられないとかそういうことではない。転校生だったので、心細かったこともあったかもしれないが、その理由はよくわからない。確かなことは、給食の時間が終わっても食べ終わらないと昼休みは永遠に来ないということだ。そのうち掃除も始まるが、食べられない。そうこうするうちに学校に行けなくなった。今でいう不登校だ。どれくらい続いたか。そのうち友だちが迎えに来てくれたりして、学校生活に戻ることができた。だからというわけではないが、自分の子どもの食に関しては寛容だ。時間をかけて食べられる分だけ食べればいいと。

今でも給食の時間のことを考えると喉が詰まりそうになる。あの時、給食の時間がたっぷりあって、残してもよくて、昼休みも居残りがなければ、私の学校の印象も変わっていただろう。こんな原体験をもつ私にとって、「タイパ」がすべていいとは思えない。効率化に人の心が追い付いていかないことはないのだろうか。

社会学者マックス・ヴェーバーは 100 年前にこう記している。「精神のない専門家、魂のない享乐的な人間。この無にひとしい人は、自分が人間性のかつてない最高の段階に到達したのだと、自惚れるだろう」(「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」大塚久雄訳、岩波文庫)。彼は人間性が薄れた社会システムがやがて到来することを預言していた。われわれは資本主義の最終段階に居るのだろうか。

うちの食事の時間は今でも結構長い。



いささかの迷いもなくー川越淑江先生追悼文ー

川越先生から薫陶を受けた人は、この文章を読んでいるほとんどの方ではないでしょうか。私もその一人です。

川越淑江先生は、1932年長野県にお生まれになり、明治大学法学部をご卒業後、子育てをしながら東京家庭教育研究所にご入会、その後、1988年からは所長として、国内外でご講演やご著書を出版され、八洲学園大学教授、日本家庭教育学会副会長を歴任し、家庭教育の普及にご尽力なさいました。

また、当協会の顧問としても指針を与えてくださる等、まさに日本における家庭教育の草分け的存在でした。

圧倒的な存在感と力強い言葉に励まされ、多くの子育て中の母親から慕われていらっしゃいました。裏表のないまっすぐな言葉は、時に厳しく響くこともありましたが、言った後の愛情深い言葉と眼差しに包まれる思いをした方も少なくないのではないのでしょうか。

八洲学園大学では私自身は川越先生のテキスト履修生だったため、お目にかかるのは、学会の時という限られた時間でしたが、今思えば、もっと吸収しておけばよかったことばかりで後悔仕切りです。会議では、思ったことを忖度なくズバツと言う姿が印象に残っております。時に議論が紛糾することもありましたが、終わってみれば、にこにこ先ほどまで言い合っていた相手とも談笑しているのです。その度量の広さと、何より、家庭教育にたいする熱量は、傍目にも火傷しそうなぐらい近寄りやすい存在でした。

ここにきて家庭教育推進の大きな星が逝ったという気がいたします。いささかの迷いもなく駆け抜けて逝ったという形容がこれほどぴったりの方もいらっしゃいません。

川越先生、ありがとうございました。先生のご恩に報いますよう、ご遺志を継ぎ、私たち家庭教育支援協会一同、家庭教育の振興に努めますので、どうぞこれからも見守ってください。

ご冥福をお祈り申し上げます。

家庭教育支援協会理事長 二川早苗

活動報告① 家庭教育支援協会令和5年度第1回研修会 2023年5月13日

昨年5月13日(土)に行われた令和4年度第1回研修会の発表内容をご報告申し上げます。

児童家庭支援センターを担うNPO法人～NPOは横のつながり～

NPO法人しずおか・子ども家庭プラットフォーム 相談支援員 田光江実子氏

『「NPO」とは、「Non-Profit Organization」又は「Not-for-Profit Organization」の略称で、様々な社会貢献活動を行い、団体の構成員に対し、収益を分配することを目的としない団体の総称です。したがって、収益を目的とする事業を行うこと自体は認められますが、事業で得た収益は、様々な社会貢献活動に充てられることとなります。このうち、特定非営利活動促進法に基づき法人格を取得した法人を、「特定非営利活動法人(NPO法人)」と言います。」「法人格を持つことによって、法の名の下に取引を行うことができるようになり、団体に対する信頼性が高まるというメリットが生じます。』(内閣府HPより)

当法人の代表は、法人化の相談を受けたときには法人化することを強く勧めます。行政は委託するときに法人格を求めることが多いからです。法人の種類は活動や規模に合うものを選ぶと良いでしょう。また、有志の熱意頼みの活動は目的の達成までに息切れしがちです。息長く活動するためには、法人化して信頼と収入を得ることが有効です。実際にNPO法人で働いてみてそのように感じるし、さらに認定NPO法人になることが必要だと感じています。また、団体同士の横のつながりを持つことが、人や物資、情報の交流を促進し、活動の幅を広げることとなり、とても重要だと感じています。

私はほんの2年ほど前まで10年間、行政の一相談員でした。その頃には民間との連携は難しいと考えていましたが、いざ



NPO 法人に就職してみると、行政と連携したい団体が多くあると感じます。こども基本法が制定されてこども家庭庁が発足し、2023 年末にはこども大綱も纏められました。子どもの意見・意向を聴取し、尊重されることが求められています。そのためにも、公民連携が促進されることを願うばかりです。

活動報告② 日本家庭教育学会 第 38 回大会 2023 年 8 月 19 日

昨年 8 月 19 日(土)に貞静学園短期大学にて行われた日本家庭教育学会第 38 回大会についてご報告申し上げます。

今大会のテーマは、「知育・徳育・体育と家庭教育」。対面式の通常開催で行われました。当支援協会からは、7名の会員が参加しました。例年どおり三会場に分かれて個人発表が行われ、10編の発表がありました。C 会場では、二川理事長が司会を務めております。

午後の全体会では、真田久氏(筑波大学特命教授、環太平洋大学教授)がテーマについて講演をいただきました。知育・徳育・体育を柔道に取り入れた嘉納治五郎を取り上げられ、三育を対立概念として捉えるのではなく、連携させることに意義があり、家庭教育において三育はそれぞれの中に三育が含まれるという考えをお話いただきました。(日本家庭教育学会会報112号から引用)

その後のパネルディスカッションでは、4人のパネラーのひとりとして攝待が登壇しました。大会主旨の中に、現在、メジャーリーグで活躍中の大谷翔平選手について「知・徳・体の調和」を備えていると表現されていました。彼の出身県に住む私として、僭越ながら大谷選手を取り上げて以下のような内容をお話させていただきました。

マスコミで取り上げられることも多い大谷選手は、「どのように育てたら、大谷選手のようになるの？」と世の子育て中の親御さんにとっては、気になるところかもしれません。遺伝的には、ご両親ともスポーツマン(野球とバドミントン)だったので、その血を受け継いだのは確かでしょう。小さいころから、スポーツに親しみ、その楽しさを知ったからこそ続けてきた。その延長線上に今の彼がいるのではないのでしょうか。実は、そこには黒子としての親の協力も不可欠なのです。彼は、野球というスポーツをとおして自らの目標を定め、その目標達成のためには何をすべきか？と熟考し、その目標のために努力を惜しまない。また、野球はチームワークですから、おのずと人間関係も学んでいったと思われま。我慢強さや謙虚さといった県民性と岩手という自然豊かな土地という環境も、知・徳・体を体現している今の大谷選手を形作っていったのではないかと推察します。

今大会のテーマである「知育・徳育・体育と家庭教育」は、私にとって大谷選手と黒子に徹したご家族の協力関係の賜物のような気が致します。(報告 攝待逸子)

活動報告③ 家庭教育支援協会令和4年度第2回研修会 2024 年 2 月 4 日

今年 2 月 4 日(日)に行われた令和5年度第2回研修会の内容をご報告申し上げます。

家庭教育で大切にしたい「つながる・つなぐ力」について

大阪成蹊大学教授、吹田市立子育て青少年拠点夢つながり未来館参与 山本智也氏

令和6年2月4日(日)、オンライン(Skype 会議)にて、令和5年度第2回会員研修会が開催され、講師を含め11名の参加をいただきました。今回は、外部より大阪成蹊大学教授、吹田市立子育て青少年拠点夢つながり未来館参与の山本智也先生を講師にお招きし、家庭教育で大切にしたい「つながる・つなぐ力」についてと題し、講演をしていただきました。

最初に、先生のこれまでの歩みをお話しされ、特に裁判所に勤務されていた経験から、家庭教育支援について具体的にお話していただきました。子育ての担い手って誰？その問いかけから始まり、法令から見た場合、第一義的責任とは何か？「核



家族の社会的孤立化」の問題等、現代の家庭の状況をわかりやすく説明いただきました。また、相談員としての対応について具体的な例をあげて、私たち参加者もどのように対応する？を考える時間は、とても良い機会だったと思います。

1 はじめに -子育ての担い手って誰？- (1)子育てを担っているのは誰？ (2)法令にみる子育ての担い手 (3)第一義責任とは (4)子育てはチームプレイ。単独プレーではない！ 2 家族の変化 -核家族、その孤立化- (1)核家族化って本当？ (2)問題は家族の孤立化 3 つながる・つなぐために大切にしたいこと (1)支援者としての基本的態度 ア こんな相談員をあなたはどのように思われますか？ イ 相談員としてどうすべきか？ ウ 自分のスタイル・クセを知る エ 相談員としての基本的態度のまとめ 4 具体的な関わりにおいて大切にしたい視点 (1)答える と 応える 内容に答える vs 気持ちに応える (2)受容 (3)肯定的に受け止める ア ポジティブ・リフレーミング イ エクセプション (4)共感的理解 (5)カウンセリング・マインドのあるやりとり ア 同感の落とし穴 イ 同感できない→ありきたりなお説教 ウ 同感できない→事実を把握してみる 5 おわりに つながり・つなぐ力の基本＝信頼関係

講演後、参加者からはやはり、カウンセリング・マインドについての質問が多く寄せられました。1時間半という時間枠での講演でしたが、とても内容の濃い講演でした。私は、第一義責任についてもっと学びたいと思いました。(尾形有三)

活動報告④ 家庭教育師・家庭教育アドバイザー交流会 2024年2月17日

今年2月17日(土)開催日本家庭教育学会主催『家庭教育師・家庭教育アドバイザー交流会』の内容をご報告申し上げます。

東アジア世界における交錯する礼節文化 筑波大学名誉教授 佐藤貢悦氏

「マナーがいかに大事かということをテーマに」という言葉で講演は始まりました。日本が東アジアの国や地域間との持続可能な真の友好関係を築くことは重要で、その恒久的実現のためには、人が大切であると思うもの、つまりは価値があると思うことを尊重することが必要なのです。その価値の総体は文化です。互いに理解可能な礼節も重要です。相互の信頼が不可欠であり、その信頼関係を構築するためには相互理解が必要なのです。ですが、相互間の礼節文化の違いは意外なほどに気づかれていません。当然と思う礼節が地域を越えたところでは通用しないということがあります。このことが文化的相互理解の落とし穴になっているとも思えます。法律を犯しているわけではないけれど、マナー的には違反をしてしまうことが、時に誤解や不信の温床になりうると言っても過言ではないのです。倫理、道徳の問題であって、法律に従っていれば良いとばかり言えない、つまりマナーが大事になってくるのです。法を犯すと罰がありますが、マナー違反をしても罰則はありません。この、マナーを身に付けさせられるのは家庭だと思えます。「マナー」は言い換えると「他国の文化に対する思いやり」と言えるかもしれません。東アジアに共通する箸の使用においても文化の違いがあります。シンガポールでは食卓を囲んだ複数の人が箸をもって一つの物を持ち上げるという仕草がありますが、これは「金運に恵まれる」祈願をする風習なのですが、日本では「骨上げ」の時に行われることからタブーとされる動作です。贈答品で「時計を贈る」ということを例にとっても中国文化圏ではタブーとされます。「腕時計」はその発音から問題にはなりませんが「時計」はその発音が「親の死に水を取る」に通じてしまうというのが理由です。この他にも「謝意」や「罵り言葉」「品のない言葉」でも文化の違いから誤解を招くことがあります。法治国家であっても、市民生活の大半は礼儀やマナーに支えられている礼治の世界なのです。(報告 木村孝子)

<編集後記>

今回も担当させていただきましたことに深く感謝申し上げます。今回も私事で恐縮ですが、ニュースレター(<https://kateikyoku.com/bulletin/index.html>)第15号に「末っ子の娘を含めて子どもたち全員が義務教育を終えたことを機会に新しいボランティアを始めようと考えており」といった内容を記載させていただきましたが、その後、養成講座にて所定課程を修了し、3回の研修を経て、今年1月より正式にガイドボランティアを開始いたしました。今回の20名募集でガイドボランティアメンバーは、現在合計40名となり、3か月に2回程度、ガイドボランティアに参加しております。この経験を今後の家庭教育支援協会の活動に活かせますと嬉しい限りです。(尾形有三)

※右の写真ご提供者:田光理事

